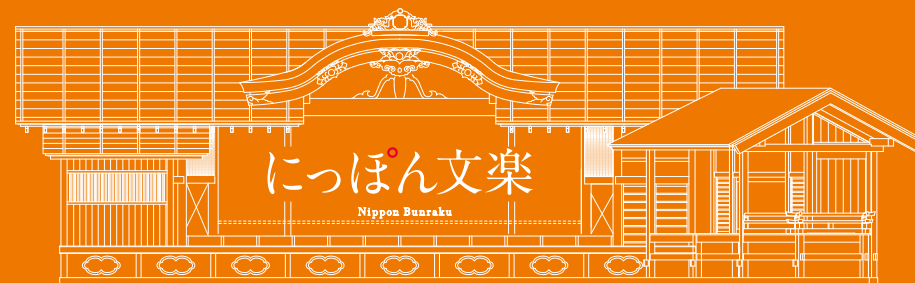


～震災復興支援～

にっぽん文楽

Nippon Bunraku
in 熊本城



日時：2018年3月17日（土）～20日（火）
昼の部 13:00～
夜の部 17:00～（17日、18日） 18:00～（19日、20日）
会場：熊本城 二の丸広場

演目・出演

ほちじん しゅごのぼんじょう
「八陣守護城」なにわいりえのだん
浪花入江の段

太 夫／正清：竹本津駒太夫、雛絹：豊竹希太夫、

鞠川・早淵：竹本津國太夫

三味線／鶴澤清介、琴：鶴澤清公

人 形／早淵久馬：桐竹勘次郎、

加藤肥多守正清：吉田幸助、

娘雛絹：吉田一輔、鞠川玄蕃：桐竹勘次郎

船頭：大ぜい、近習：大ぜい、忍び：大ぜい

〈解 説〉

太 夫：豊竹芳穂太夫／三味線：鶴澤寛太郎／人 形：桐竹紋臣

〈休憩／文楽人形と記念撮影〉

めんうり
「面売り」 野澤松之輔=作詞・作曲 藤間勘寿朗=振付

太 夫／面売り：豊竹呂勢太夫、案山子：豊竹芳穂太夫、

ツレ：豊竹希太夫、

三味線／鶴澤藤蔵、鶴澤寛太郎、鶴澤清公、鶴澤清允

人 形／おしゃべり案山子：吉田簀一郎、面売り娘：吉田勘彌

人形部：吉田玉勢、吉田簀之、吉田簀悠、吉田玉征

囃 子：望月太明藏社中

演目解説

「八陣守護城 浪花入江の段」

加藤清正が、秀吉死後も豊臣家に忠義を尽くし、徳川方に毒殺されたという俗説に基づいて作られた。幼君の身代わりに毒を飲みほした清正。毒が回ったことを徳川方に悟られぬよう居城へ戻り、死期を悟りながらも、主家の安泰を祈る清正の姿を描く。江戸時代に作られた作品であるため、幕府を憚り、それぞれの役名は他に置き換えられている。

先君の死で、幼君・春若（豊臣秀頼）が残され、力を増していた北条時政（徳川家康）は、権力を我がものにしようと春若毒殺の謀略を企てる。その動きに気付いた先君からの忠臣・加藤正清（加藤清正）は、春若の代わりに毒を受けながらも、決然と居城がある国元へと旅立つ。

〈今回上演される「浪花入江の段」は、この後から始まる〉。

舞台は正清の御座船の上。正清の息子・主計之介の許嫁である雛絹を居城へ連れ帰るため、共に船に乗っている。

正清の様子を探りに時政の家臣・早淵久馬が船を訪れる。しかし、毒を飲んでいる筈の正清が元気なことに驚いて帰る。代わって、時政の使者・鞠川玄蕃が現れ、餞別として「鎧櫃」を置いていく。玄蕃が去った後、「鎧櫃」の中から鉄砲を持った忍びの者が飛び出し、正清を襲う。毒が回って来た正清だったが、見事に忍びの者を切り捨てる。正清は、何事も無かったかのように、船子たちの「清めの舟歌」を聞きながら船出して行く。

「面売り」

江戸時代、様々な芸人や物売りが行き来し、街中は賑やかだった。その情景を彷彿とさせる小品。文楽では「景事」と呼ばれる舞踊物の一つだ。

面白可笑しく言葉を並べ立てる「おしゃべり案山子」と言う大道芸人の男と「面売り」の娘が登場する。面売りは、おしゃべり案山子から一緒に商売をしようと持ちかけられ、話に乗る。「ひょっとこ」「おかめ」……、おしゃべり案山子は、次々と面を取り出し、口上を述べながら売る稽古を始める。やがて二人は、息の合った掛けあいを始め踊り出すのだった。

総合プロデューサー：中村雅之
アシスタントプロデューサー：榎本かおり（BOX4628）

アドバイザー：宮本芳彦（宮本卯之助商店）
グラフィックデザイン：みやはらたかお

舞台監督：山添寿人
舞台機構・大道具：関西舞台
音響・照明：ピーエーシーウエスト
組立施工：菜の実建築工房
幔幕製作・施工：宮本卯之助商店

運営ディレクター：原昇
運営：ミュージメントワークス

建築設計・監理：田野倉建築事務所
構造設計・監理：福山弘構造デザイン

制作：一般財団法人 にっぽん文楽プロジェクト
制作協力：公益財団法人 文楽協会

特別協力：熊本県
協力：独立行政法人 日本芸術文化振興会
北西酒造
熊本県文化協会
加藤神社
下通繁栄会

主催：日本財団
一般財団法人にっぽん文楽プロジェクト
熊本市（お城まつり運営委員会）

©2010 熊本県くまモン#K28634

